

# ドイツ語圏の 日本研究から見た神仏分離

The Separation of Shintō and Buddhism (*Shinbutsu Bunri*) Seen from  
the Perspective of Japanese Studies in Germany

ウルズラ・フラッヘ

杉原早紀 [訳]

Ursula FLACHE Translated : SUGIHARA Saki

## 序論：訳語の問題

①ドイツならびに西欧の日本研究における神仏分離

②宗教改革時代の偶像破壊

③神仏分離は実際どの程度「成功」したのか？

—今日の日本における神仏分離の意義—個人的感想

## [論文要旨]

本論文ではドイツ語圏の神仏分離研究の三つの側面を扱う。序論として「神仏分離」の独訳に関する問題点を述べる。第1ポイントとして、ドイツおよび欧米の日本研究におけるこれまでの神仮分離の扱いについて概略を記す。神仮分離が一般の歴史著作や参考図書で取り上げられるようになったのは最近の動きである。明治時代における神道研究では二つの傾向が見られる。一つは客観的批評する研究者（シュピナー、チェンバレン）、もう一つは国家神道の視点を引き取る研究者（アストン、フロレンツ）。第二次大戦前の指導的な神道研究者（グンデルト、ボーネル、ハミッシュ）がナチスのイデオロギーに近い視点から研究結果を発表したため、戦後には神道についての研究がタブー視され、当分の間完全に中止となった。1970年代に出版されたロコバントの研究に続いて、1980・90年代にいくつかの神仮分離に関する研究文献（グラバード、ハーディカ、ケテラー、アントニ）が発行された。最近の研究（ブリーン、サール、アンプロス、関守）ではケーススタディーや地方史が注目される傾向にある。ドイツには宗教改革時代の偶像破壊という、明治時代の日本の神仮分離と非常に似た出来事があったために、ドイツの研究者は神仮分離に特別な関心を寄せている。そこで、第2のポイントとして、ヨーロッパにおける宗教改革と絡めて偶像破壊運動を詳しく取り上げ、ヨーロッパの宗教改革と日本の廢仏毀釈の比較を行う。共通点として両者が宗教的美術に大きな障害をもたらした改革運動であることが挙げられる。相違点としてヨーロッパにおける宗教改革が宗教的な動機をもった運動で、神仮分離が政治的な動機をもった政策であった。終わりに第3ポイントとして、簡単に筆者の個人的な意見をまとめ、神仮分離が実際どの程度「成功」したのか、そして神仮分離の今日の日本における意味を考察する。